

凶人、姓文忌寸也<sup>3</sup>、字云<sup>4</sup>上田三郎矣、天骨邪見、不信<sup>5</sup>三宝、凶人之妻、有<sup>6</sup>上毛野公大橋之  
女、一日一夜、受<sup>7</sup>八齋戒、參行梅過、居於衆中、夫從外歸家、而見無妻、問家人、  
答曰、參往梅過、聞之瞋怒、即往喚妻、導師見之、宣<sup>8</sup>義教化、不信受<sup>9</sup>曰、為無用語、  
汝婚吾妻、頭可<sup>10</sup>所割破、斯下法師矣、惡口多言、具不得<sup>11</sup>述、喚妻歸家、即犯其妻、  
率爾閉著<sup>12</sup>蟻、蟻痛死、雖不加<sup>13</sup>刑、而免<sup>14</sup>惡心、濫罵令<sup>15</sup>恥、不<sup>16</sup>恐邪姪、故得<sup>17</sup>現報也、口  
生百舌、雖<sup>18</sup>万言白、慎莫<sup>19</sup>誹<sup>20</sup>僧、倭蒙<sup>21</sup>災故也、

3 文(來) 一 文

4 忌(來) 一 忌

5 橋(來) 一 橋

6 妻(來) 一 ナシ

7 蟻(國) 一 蟻

8 倭(國) 一 倭(國) 一 ナシ

9 災(來) 一 文

讀<sup>1</sup>解蝦命放<sup>2</sup>生現報解<sup>3</sup>所助緣第十二

山背國紀伊郡部內、有<sup>4</sup>一女人、姓名未詳也、天年慈心、隨信<sup>5</sup>因果、受持五戒十善、不  
殺<sup>6</sup>生物、聖武天皇代、彼里牧牛村童、山川解<sup>7</sup>八、而將<sup>8</sup>燒食、是女見之、勸<sup>9</sup>牧牛、曰、  
幸願<sup>10</sup>此解免<sup>11</sup>我、童男辭<sup>12</sup>不聽、曰猶燒噉、慙<sup>13</sup>誅乞、脫衣而買、童男等乃免之、勸<sup>14</sup>請義禪  
師、令<sup>15</sup>呪願<sup>16</sup>以放生、然後入<sup>17</sup>山、見<sup>18</sup>之大蛇、飲<sup>19</sup>於大蝦、誂<sup>20</sup>大蛇言、是蝦免<sup>21</sup>我、略<sup>22</sup>奉  
多帛、蛇不<sup>23</sup>聽吞、女寡<sup>24</sup>幣帛、而禱<sup>25</sup>之曰、汝為神祀、幸乞免<sup>26</sup>我、不<sup>27</sup>聽猶飲、又語<sup>28</sup>蛇言、  
替<sup>29</sup>此蝦<sup>30</sup>以吾為<sup>31</sup>汝妻、故乞免<sup>32</sup>我、蛇乃聽之、高捧<sup>33</sup>頭頸、以瞻<sup>34</sup>女面、吐<sup>35</sup>蝦而放、女期<sup>36</sup>蛇  
言、自<sup>37</sup>今日<sup>38</sup>經<sup>39</sup>七日<sup>40</sup>而來、然白<sup>41</sup>父母、具陳<sup>42</sup>蛇狀、父母愁言、汝了<sup>43</sup>唯一子、何誑<sup>44</sup>託故、  
作<sup>45</sup>不能語、時行基大德、有<sup>46</sup>紀伊郡深長寺、往<sup>47</sup>白<sup>48</sup>事狀、大德聞<sup>49</sup>曰、烏呼難<sup>50</sup>量之語、唯能  
信<sup>51</sup>三宝耳、奉<sup>52</sup>教歸<sup>53</sup>家、当期<sup>54</sup>日之夜、閉<sup>55</sup>屋堅<sup>56</sup>身、種<sup>57</sup>々<sup>58</sup>禱<sup>59</sup>願、以信<sup>60</sup>三宝、蛇繞<sup>61</sup>屋、蛇

1 讀 一 讀

2 曰(來) 一 白

3 否(來) 一 ナシ

4 誂(來) 一 誂

5 蝦(來) 一 蝦是蝦

6 帛(來) 一 幣帛

7 幣(來) 一 幣

8 禱(來) 一 禱

9 汝(來) 一 ナシ

10 聞(來) 一 同

軀腹行、以<sup>1</sup>尾打<sup>2</sup>壁、登<sup>3</sup>於屋頂、昨<sup>4</sup>草拔開、落<sup>5</sup>於女前、雖然蛇不<sup>6</sup>就<sup>7</sup>女身、唯有<sup>8</sup>爆  
音、如<sup>9</sup>跳<sup>10</sup>蟬、明日見<sup>11</sup>之、大解<sup>12</sup>八集、彼蛇条然、揃<sup>13</sup>段切之、乃知<sup>14</sup>、讀<sup>15</sup>放<sup>16</sup>解<sup>17</sup>報<sup>18</sup>恩矣、無<sup>19</sup>悟  
之虫、猶受<sup>20</sup>恩返<sup>21</sup>報<sup>22</sup>恩、豈人<sup>23</sup>忘<sup>24</sup>恩歟、自此已後、山背國、貴<sup>25</sup>乎山川大解<sup>26</sup>、為<sup>27</sup>善放<sup>28</sup>生  
也、

11 登(來) 一 免

12 背(來) 一 背背

生<sup>1</sup>愛欲<sup>2</sup>恋<sup>3</sup>吉祥天女像<sup>4</sup>感<sup>5</sup>應示<sup>6</sup>奇表緣第十三

和泉國泉郡、血淨上山寺、有<sup>7</sup>吉祥天女攝像、聖武天皇御世、信濃國優婆塞、來住<sup>8</sup>於其山  
寺、睨<sup>9</sup>之天女像、而生<sup>10</sup>愛欲<sup>11</sup>、繫<sup>12</sup>心恋<sup>13</sup>之、每<sup>14</sup>六時<sup>15</sup>願<sup>16</sup>、々如<sup>17</sup>天女<sup>18</sup>容好<sup>19</sup>女賜<sup>20</sup>我、優婆塞夢  
見<sup>21</sup>、婚<sup>22</sup>天女像、明日瞻<sup>23</sup>之、彼像裙腰、不<sup>24</sup>淨染汚、行者視<sup>25</sup>之、而慚<sup>26</sup>愧言、我願<sup>27</sup>似<sup>28</sup>女、何忝<sup>29</sup>天  
女事<sup>30</sup>自交<sup>31</sup>之、愧不<sup>32</sup>語<sup>33</sup>他人、弟子儉聞<sup>34</sup>之、後其弟子、於<sup>35</sup>師無<sup>36</sup>礼、故<sup>37</sup>讀<sup>38</sup>擯<sup>39</sup>去、所<sup>40</sup>擯<sup>41</sup>出里、  
訕<sup>42</sup>師程<sup>43</sup>事、里人聞<sup>44</sup>之、往<sup>45</sup>問<sup>46</sup>虛美、並<sup>47</sup>瞻<sup>48</sup>彼像、淫<sup>49</sup>精染穢、優婆塞不<sup>50</sup>得<sup>51</sup>隱<sup>52</sup>事、而具<sup>53</sup>陳<sup>54</sup>語、  
諒<sup>55</sup>委<sup>56</sup>深信<sup>57</sup>之者、無<sup>58</sup>感<sup>59</sup>不<sup>60</sup>心也、是奇異<sup>61</sup>之事矣、如<sup>62</sup>涅槃經云、多姪<sup>63</sup>之人、画<sup>64</sup>女生<sup>65</sup>欲<sup>66</sup>者、其  
斯謂<sup>67</sup>之矣、

1 上(國) 一 ナシ

2 壇(國) 一 概

3 語(國) 一 語

4 之(來) 一 ナシ

窮<sup>1</sup>女王婦<sup>2</sup>敬<sup>3</sup>吉祥天女像<sup>4</sup>得<sup>5</sup>現報緣第十四

聖武天皇御世、王宗廿三人、結<sup>6</sup>同心、次第<sup>7</sup>為<sup>8</sup>食、設<sup>9</sup>備<sup>10</sup>宴樂、有<sup>11</sup>一窮女王、入<sup>12</sup>宴樂  
列、廿二王、以<sup>13</sup>次第<sup>14</sup>設<sup>15</sup>宴樂<sup>16</sup>已訖、但此女王、獨未<sup>17</sup>設<sup>18</sup>食、備<sup>19</sup>食無<sup>20</sup>便、大恥<sup>21</sup>貧報、至<sup>22</sup>

1 王(國) 一 ナシ



故に乞はくは我れに免せ」といふ。蛇すなはち聴し、高く頭頸を擡げて女の面を瞻り、蝦を吐きて放つ。女蛇に期りて言はく「今日より七日を経て来れ」といふ。然うして父母に白して、具に蛇の状を陳ぶ。父母愁へて言はく「汝ただ一子なることを了ふべし。何の証き託くが故に能はぬ語を作す」といふ。時に行基大徳紀伊郡の深長寺に有す。往きて事の状を白す。大徳聞きて曰はく「嗚呼、量り難き語なり。ただし能く三宝を信はむのみ」とのたまふ。教を奉りて家に帰る。期れる日の夜に當りて、屋を閉ち身を堅め、種々願を発して三宝を信ふ。蛇屋を繞みて蜿蜒ひ腹行き、尾を以ちて壁を打ち、屋の頂に登りて草を咋ひて抜き開き、女の前に落つ。然りといへども蛇女の身に就かず。ただし爆竹音のみ有り。跳ち鱗鬣るるが如し。明日に見れば、大蟬八集り、彼の蛇を条然に捕段切る。すなはち知る、贖ひ放てる蟬の恩を報ゆることを。恬無き虫すら、なほし恩を受けて返りて恩を報ゆ。あに人にして恩を忘れむや。此れより已後、山背国に山川の大蟬を貴びて、善せむとして生を放つなり。

俗云、波久乃岐岐、薄情也(和名抄)。三広領・人・二十・陌(真白切)に「帛幣帛」とあるのに拠つて帛と帛訓に訓む。上巻一縁のごとく「みてぐら」と訓んでもいいが、上文にみえる「帛奉多帛」の「帛」が神へのささげものを必ずしも意味しないことに配慮し、連続性を重視して訓む。三財を代償にして何かを求める。名義抄では「帛」「贖」などに「ツノル」の訓。三上文では帛を手とるという条件をことばで提示。ここでは実際に帛を手とてさらに神として祀るという新たな条件が示される。三以下は行文、中巻八縁に類似。上巻八縁、帛を手とる、神として祀る、妻となる、と次第に好条件が提示されてゆく。妻が神よりも上位に位置づけられていることが注目される。

一何がおまえに憑いてたましているからなのか、でもしないことを言うのは。  
二深草寺。「深草 不賢平佐(高山寺本和名抄)」。行基の四十九院のひとつとして天平三年(三)に建立された法華院か。所在未詳。  
三蛇との約束を守つて蛇の妻となるならば不邪淫戒(五戒のひとつ)を犯すことになり(上巻八縁)、約束を破るならば不妄語戒(五戒のひとつ)を犯すことになる。どちらの道を進んでも解決はない。改めて放生と報恩の物語が語りおこされなければならない。  
四「虫」の語にはは蝶、飛蝶、さまざまな用法があるが、ここでは人以外の動物の総称。  
五このような風習の存在は未詳。九世紀後半に石清水八幡で放生会がおこなわれ、以後盛行するに至ったこととかかわりがあるか。

## 第十三縁 あやしき表(二)の説話。今昔物語

## 愛欲を生し吉祥天女の像に恋ひて感心して奇しき表を示す縁 第十三

和泉国泉郡の血淨上山寺に、吉祥天女の攝像有す。聖武天皇の御世に、信濃国の優婆塞来りて其の山寺に住む。天女の像に睥ちて愛欲を生し、心を繋けて恋ひ、六時ごとに願ふ。「願はくは天女の如き容好き女を我れに賜へ」とねがふ。優婆塞夢に見て、天女の像に婚ふ。明日に瞻れば、彼の像の裾の腰に不淨染み汚れたり。行者視て慚愧ぢて言さく「我れ似たる女を願ふ。何すれぞ忝く天女専自づから交りたまふ」とまうす。婉ぢて他人に語らされども弟子偷に聞く。後に其の弟子師にれ無し。故に憤め擯ひ去らる。里を擯出され師を訛り事を程す。里人聞き、往きて虚実を問ひ、並に彼の像を瞻れば淫精染み穢れたり。優婆塞事を隠すこと得ずして、具に陳べ語る。諒に委る、深く信はば感きて応へずといふこと無し、と。是れ奇異しき事なり。涅槃経に云ふが如し「多姪の人は画ける女にすら欲を生ず」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

集・十七ノ四十五に書承。  
六男女親子間の心憎を執着としてとらえ、それを悪と考える立場からいう語。仏典語。  
七男の愛欲の対象となる例に、古本説話集・下・六十二がある。源氏物語・帚木に「吉祥天女を思ひかけむとすれば」とみえる。  
八上巻二縁。血淨上山寺は大阪府和泉市横尾山町の施福寺の地に所在したが、この寺には聖観音の木像も安置されていた。上巻三十七縁。八塑像。彩色がほどこされていたであろう。  
九「壺」は盃(水、酒、米、などをいれる瓦器)の類をあらわす文字。大安寺伽藍縁起并流記資財帳にみえる「撰四天王像」の「撰」を攷証は「壺」のあやまりとするが、塑像をあらわす文字が「壺」なのか「撰」なのかは再考の余地がある。法隆寺五重塔初層内蔵の塑像群を、法隆寺伽藍縁起并流記資財帳は「壺塔本陣面具撰」としている。  
一〇最勝具。  
一一日没、初夜、中夜、後夜、晨朝、日中。  
一二「三」今「使人於睡夢中、得見於我」随所求事、以事告知。金光明最勝王經大吉祥天女增長財物品。金光明經と本説話との関係は和辻哲郎の指摘がある。  
一三精液。精液を「淫」というのは仏典語。たとえは四分律・十三僧伽法にみえる。  
一四「行者」と称されるのは本書では優婆塞。上巻二十八縁、中巻二十一縁、下巻十四縁、二十八縁。二五どういう理由で。  
一六淫事。下文の「事」と同じ。  
一七国分寺書院本訓読(程アラハス)。  
一八精液。  
一九「畫如有人見二画女像、亦復生、以生食故、得種福罪」(大般涅槃經・光明遍照高貴德王菩薩品)。



窮しき女王吉祥天女の像を帰敬ひて現報を得る縁

## 第十四

聖武天皇の御世に、王宗二十三人同じき心を結び、次第をもちて食の為に宴樂を設備けたまふ。一の窮しき女王有す。宴の衆の列に入りたまふ。十二の王次第を以ちて宴樂を設くること已に訖りたまふ。ただし此の女王のみ独りまだ食を設けたまはず。食を備くるに便無し。大に貧しき報を恥ぢたまひ、諸衆の左京の服部堂に至り、吉祥天女の像に対面ひて哭きて曰さく「我れ先の世に貧窮の因を殖ゑ、今窮しき報を受く。我が身は食の為に宴会に入り、徒らに人の物を啖ふ。食を設くるに便無し。願はくは我れに財を賜へ」とまうす。時に其の女王の兄、忿々しく走り来り、母に白して曰さく「快きかな。故京より食を備けて来る」とまうす。母王聞きたまひて走り到りて見たまへば、王を養へる乳母なり。乳母談りて曰さく「我れ客を得と聞く。故に食を具けて来る」とまうす。其の飲食蘭し。美き味の芬馥しきこと比無く等無し。見らぬ物無くして、設けたる器みな鏡なり。荷はしめたる人三十人なり。

王衆みな来りて饗を受けて喜びたまふ。其の食先より倍る。王衆讃めてのたまはく「富める王なり。然らば何れぞ貧しくして敢て能くする。余り溢ち飽き盈ちて、我が先に設けたるより尤れたり。儂歌の奇異しきこと鈞天の樂の如し」とのたまふ。或るいは衣を脱きて与へ、或るいは裳を脱きて与へ、或るいは錢と絹と布と綿との等きを送りたまふ。悦の望に勝ぜずして、衣と裳とを捧持ちて乳母に著せたまふ。然うして後に堂に参り、尊き像を拝まむとしたまふ。乳母に著せたる衣と裳と、其の天女の像に被る。疑ひて往き、乳母に問ひたまへば、答へてまうさく「知らず」とまうす。定めて知る、菩薩感応して賜ふ所なり、と。因りて大に財に富み、貧窮しき愁を免る。是れ奇異しき事なり。

法華經を写し奉り供養するに因りて母の女牛と作りし

## 因を顕す縁 第十五

高橋連東人は、伊賀国山田郡轍代里の人なり。大に富みて財饒なり。亡にたる母の奉為に法華經を写して盟ひて曰さく「我が願に縁有る師を請へ、

第十四縁 善業についての現報説話。今昔物語集・十七ノ四十六に書承。

一 女子である諸王。二世以下四世以上(令集解、職員令・中務省)。「女王ヒメオホキミ」(新日本紀・二十二)。

二 「意」は「衆」の意。下文には王衆とみえる。

三 この数字が何を意味するのかわかりません。

四 宴に出席する人々の一員となっていた。

五 この女王が宴を開く順序がまわってきたのである。

六 元興寺の小塔院の地に所在したか。

七 「貧窮」は仏典語。「貧窮之因」の具体相は示されていない。儂、慳、などの行為であろう。

八 「まうす」の表記を「窮」「貧」「貧」「貧」「貧」と変化させている。

九 運がよい。この呪はのことはを伝えるためにだけに登場している。

十 松浦員後は、本説話に関して天平十二年十一月から同十六年正月迄、奈良の都を離れて居た間のことで、「故京」とは即ち平城京を指すものかとする。当否を判断することが困難である。

十一 二世の女王には十三歳までは乳母が給せられた(後宮職員令、令集解・後令)。これをいう。

十二 飲食をいれる器。金鳳翼。法隆寺伽藍縁起井流記寶帳には白銅製のものが多くみえる。

十三 供物をいれるのに用いたのであろう。乳母の持ち来った飲食がすべて食器にいれられていた、という記述は、この飲食が仏前にささげられた供物であったことを暗示している。

十四 この数字が何を意味するのかわかりません。

十五 この女王以前の二十二人の女王の宴で供さ

れた食物よりもすぐれている。

十六 富める女王でないならば、貧しくしてこのようなことができるのはどうしてだろうか。

十七 この女王の宴において歌舞されたという記述はない。

十八 天上の音楽。文選・西京賦・李善注はしめ諸書にみえる。

十九 二十二人の女王のうちのある一人は。

二十 類似した説話展開の中巻三十四縁は、このあたりに「過々に豊ふ」とある。乳母は常についていた、という記述は本説話に欠けている。

二十一 然後の前後に多くの時間経過が考えられる例に、上巻三縁がある。

二十二 衣と裳とは、吉祥天女の靈験の証拠となっている。

二十三 「大吉祥天女菩薩摩訶薩(大吉祥天女十二名号縁)」とあるように、吉祥天女は菩薩とされることがあった。覺經には菩薩の呼称が散見するが、本説話の時代としては珍しい呼称。

二十四 若菜・金銀財宝・半羊裘・飲食衣服、皆得・随心受・諸供養(金光明最勝王經・大吉祥天女增長財物品)。大吉祥天女十二名号縁には「能除一切貧窮業障・獲得豐饒財宝富貴」とある。後代の覺經・一〇九吉祥天女・大吉祥天女・利生第一、感應速疾也」としている。

二十五 三至縁・法十一に引用。三至縁より本朝法華縁記・十一〇六に書承。今昔物語集・十二ノ二十五に書承。

二十六 未詳。本説話以外に所伝をみない。

二十七 三重県上野市摩代(比)あたり。

二十八 亡母の追善をおこなう、という東人の願いに関係のある僧。